

# 朝鮮半島南北首脳会談の巨大新聞報道

村 主 道 美

2000年6月、韓国大統領金大中が北朝鮮を訪問し、労働党総書記金正日と南北分断後初の南北首脳的面談を行った。そのときの両首脳の行動はつぶさに報じられ、会談は南北和解のための歴史的一歩となったという解釈が、朝日、読売などの巨大新聞による報道を通じて、市民権を得ようとしている。飢餓も、身分制度も、不平等も、政治犯収容所も、覚醒剤輸出も、ミサイル開発も、誘拐された外国人の帰還問題も、改善されたわけではなかったが、マスコミの描く北朝鮮像は、今までの否定的なものから肯定的な方向へと少なくとも一時的には大きく転換した。

社会主義らしからぬ権力の世襲をした金正日は無慈悲な独裁者からユーモアのセンスすらある政治的演出家となり、出迎える平壤市民は独裁的政治家に盲従せざるをえない情報を欠いた集団というイメージから、南北和解を熱烈に願う朝鮮民族となり、水と油ほどの体制の相違は「統一」という共通の目的をもつ二者として括られた。

真に優れたジャーナリズムは既成の状況認識を打破する力をもっているはずであるが、集団としてのジャーナリズムは例外なく、単純で人々に理解されやすいステレオタイプを対象ごとに作り上げて行く。それが綿密な研究の過程を経て作られるものなら仮にそれが誤っていても止むを得ないのだが、以外なほど安易に作られる場合もある。つまり、事実から鋳型ができるのではなく、鋳型に事実の描写が流しこまれる場合がある。今回の南北会談がい

かに報道され、新しいステレオタイプがいかに形成されつつあるかは、それ自体がひとつの注目に値する事実として、考察に値する。

今回の南北会談における状況の特徴はまず、会談が北朝鮮という、取材に極度の制限のある場所で為されたことである。次に、韓国のプレスセンターおよびマスコミが、この問題についての諸外国に対する主要な窓口になり、外国の新聞が独自の種財源をもちにくかったことである。第三に、北朝鮮の指導者である金正日については、あまりにも映像情報が不足していたので、その肉声や歓談する様子が報じられただけでも、新しさを外国には与えたことである。また第四に、この会談が南北において初の首脳会談であったがゆえに、その実現自体が一種の感動を朝鮮南北の国民に与えたということである。そして第五に、後述のように、韓国政府がそのマスコミに対し、報道の自由を制限した点である。

金大中がソウルを飛び立ち平壤に到着した6月13日の夕刊のヘッドラインは次のようになっている。下線は筆者による。

南北両首脳が握手、平壤、分断 55 年 初会談へ

総書記、空港出迎え

両首脳、笑顔交わす

(朝日 6 月 13 日、夕刊 1 面)

両首脳、和解へ一歩

車中で実質協議

北朝鮮、主導権確保狙い？

「すべて話したい」韓国大統領 会談へ強い意気込み

韓国人記者 同乗に驚き ソウルのプレゼン

金総書記が初の生出演 国賓待遇の証拠？

総書記出迎え 事前に伝わる (朝日 6 月 13 日、夕刊 2 面)

南北両首脳が握手 金大中大統領 平壤入り 分断 55 年、初の会談

金総書記 空港に出迎え

夢に見た北の山河 金大統領が到着声明 (読売 6 月 13 日、夕刊 1 面)

南北和解へ歴史的一步 金総書記、最大の歓迎

歓談、リムジン同乗、金大統領到着声明「私たちは運命共同体」

平壤着、世界へ生中継、2 人とも終始にこやか

権力中枢「青瓦台」平壤に“引っ越し” (読売 6 月 13 日、夕刊 2-3 面)

この段階で、朝日、読売 2 紙の見出しだけを比べた場合、次のことに気づく。第一は、それらがほぼ同一であることである。南北両首脳が握手したこと、この握手が和解への一步であったこと、分断後 55 年たって初の会談が行われたこと、金総書記が空港に出迎えたこと、2 人が笑顔だったこと、金大統領が声明を発表したことが異口同音に両新聞で強調されている。このことが既に、二つの新聞がそれぞれの違った角度から対象を観察できていない、すなわち観察対象と新聞との間に共通の介在者がいることを暗示しているのかもしれない。

第二は「歴史的」という会談の形容である。金大統領はソウル出発に際し、平壤にて金正日、国防委員長と歴史的な南北首脳会談を行うことになるだろう (読売 6 月 13 日、夕刊 2 面) と述べており、この歴史的という言葉がヘッドラインに模倣されていると推察される。読売新聞では、両首脳の握手の写真の解説としても、「平壤郊外の順安空港に到着し、歴史的握手をする金大韓国大統領と北朝鮮の金正日総書記」という形で使われている。言うまでもなく、歴史的という形容は過去を回帰して可能なことであり、現在についてそれが言えるのは情勢を不可逆的に決定づける事柄が起こった場合である。

第三は、会談の実現自体に大きな価値を認めようとする姿勢である。金大統領の13日の出発演説（ソウル）、到着演説（平壤）には、訪問自体が大きな成果であるという政治家としての主張が明確である。出発の際には〈南北首脳会談は会うこと自体に大きな意味があると思う〉と言い、到着すると〈半世紀の間に積もった恨みを一度に解消することはできない。しかし、始まったことは、半分が成就したのと同じだ〉と述べている。韓国大統領自身が、訪朝自体が有意義であるという形の評価を希望しており、朝日、読売は望まれた通りの基準で状況を評価している。

本文では情景が劇的に描かれている。両首脳は「“マンセー”（万歳）の嵐の中、がっちりと両手を握りあった」「南北最高首脳の出会いは、“和解と協力”の時代の幕開けを強く予感させた」（ともに読売、6月13日夕刊、2面）とされ、予感したかもしなかったか、という記者の感覚の問題が断定の根拠となっている。この“和解と協力”も、金大中のソウル出発演説の中に見られる言葉である。北朝鮮の平壤市民が“マンセー”（万歳）と叫びながら要人を歓迎する様子は、ポーランドが撮った北朝鮮についての映画「パレード」の中では美しいというより独特の異様さを作り出しているが、読売は、「群衆からは“金正日”“マンセー”の声が一層高まり、手にしたチンドルレ（ツツジ）の造花がちぎれんばかりに打ち振られた」（読売、6月13日夕刊、2面）と肯定的に描いている。なおこの南北国民が“マンセー”を叫んだという報道記事はその後数日間にたびたび見られる描写であり、朝鮮大衆が出てきて言う言葉は常に“マンセー”であるかのような、奇異な印象を醸している。

常識のある読者には、この6月13日の時点で、次のような疑問が沸くはずである。

第一に、これほど金大統領演説に沿った形で状況が描かれるということ自体が新聞の追従性を示唆しているし、巨大新聞が共通してその手法を取っているという点もまたなんらかの情報統制を予感させる。金総書記が空港で

出迎えたということや、車に同乗したという点は予想外であったかもしれないが、どうであるにせよ、いつか両首脳はカメラと大衆の前で握手をし、微笑んだであろうし、また平壤において金大中は歓迎の人並みに囲まれたであろう。カメラの前でたぶん両首脳は微笑むであろう、そしてカメラのない場所ではその微笑みを止めるであろう。にこやかなのは表の顔であることは分かり切っている。それをく終始にこやか>(読売)と書くのは誇張であり、政治家によって定められたシナリオへのマスコミの負担であり、無料で広告を政府に出させているのと同じである。

第二に、この初対面の場面は、南北朝鮮の将来について何を示すサインとなるのか？ 第一回の会談の内容すら不明で、共同声明も出されていない段階で、なぜそれが歴史的和解への第一歩だと言えるのか？ これは見出しに何が省略されているかにもよる。「南北和解へ歴史的一歩」とは南北和解へ歴史的一歩が踏み出された、ということなのか、踏み出されるだろう、ということか、それとも踏み出されることが期待されている、ということなのか？ こと見出しに関しては、新聞は言語の曖昧性を嫌うどころか、それを逆に利用している。

会談を評価する前提も怪しい。首脳が会合すると戦争の可能性が消えると言えるかという点、そうでもない。ナチスドイツとソ連は歴史的な不可侵条約締結後しばらくして死闘を始めている。

首脳の初会合が即、歴史、あるいは歴史的事実と言えるかという点、そうでもない。たとえばフルシチョフとアイゼンハワーはソ連、米国の首脳として会っているが、そののちの米ソ関係の冷戦の進展のなかで、この会談はさほど画期的なものとして記録されてはいない。

第三に、韓国大統領の演説も、北朝鮮の数十万人の出迎えも、権力がマスコミに見て欲しいために提供する素材である。本来、権力に対して批判的であることによって社会に貢献しようとするのがジャーナリズムのエトスなら、なぜマスコミはこれほどに、権力から与えられた素材を素直に、見えるがままに受け入れるのだろうか？ たとえば、100里の道を行く者が99里

を以て半ばと考えるのが、外交における慎重さというものであろうに、1歩踏み出ただけで、道の半ばに達したことになるのだと述べる韓国大統領の発言の過度の楽観性に、批判の目をなぜ向けないのだろうか？

第四に、些末な情報は読者にとってかえって害悪ではないか？ 新聞は平壤市内の地図を乗せ、首脳を乗せたリムジンの移動経路を説明しようとしている。たとえば戦争における戦闘状況を説明する地図とはちょうど対照的に、この種の説明は全くどうでもいいことであり、分析の対象が乏しいゆえに、紙面が些末な要素で埋められているにすぎない。

13日、両首脳は27分間の南北首脳会談を行った。金総書記は欠席したが、金大中大統領のための晩餐会も行われた。両新聞の14日朝刊は以下のような見出しとなる。

直通電話の必要性一致

南北首脳、初の会談

金大統領 敵対関係、清算訴え

金総書記、世界意識し礼節演出

晩餐会は出席せず「実利」と使い分け（朝日、6月14日、1面）

この日を待っていた「雪解け」世界が注目

初の首脳会談 主なやりとり 勇敢な訪問、人民も歓迎、空港出迎え、真心感じた、

日本、サミットで後押し、中国 干渉の排除強調

沿道60万人報道、「自発的」「用意」違う説明

「同じ民族の親近感」（朝日、6月14日、2-3面）

「歴史の一日、劇的演出 韓国側、期待と注文と

会談後にらむ与野党 影落とす主導権争い

韓国財界 「特需」見越し期待感 株価は模様眺め、急落

「会談実現自体が成果」 ロシア，影響力強化狙う

対立の構図，緩和に期待， 台湾，李前総統

肩を並べ同じ車に，沿道 25 キロ花振る列 （朝日，6 月 14 日，  
4-5 面）

在日同胞ら「マンセー」南北首脳握手に思いはせる（朝日，6 月 14 日，  
38 面）

「民族の和解，協力を推進」

金大統領と金総書記合意

ホットライン前向き

北朝鮮報道 「南側」「金大中大統領」呼称で韓国に配慮

（読売，6 月 14 日，1 面）

「金正日外交」劇的な演出

「南北の友情」を強調

援助獲得へ関係改善決断

万感込め「歓迎」「感謝」 南北首脳初会談

天気も成功を予言

大統領

同じ民族，礼節守る

総書記

歴史を作っていこう

大統領

世界が注目，成果を

総書記

（読売，6 月 14 日，2-

3 面）

「対話」将来見据えて“歴史の瞬間” 熱い視線

ソウル TV に釘付け

平壤 万歳，沿道にこだま

車中 手を握り合い

意志疎通の重要性確認

## 離散家族、再開へ努力

北朝鮮、金永南氏スピーチ（読売、6月14日、4-5面）

国内でも南北融合の兆し 韓国民団、朝鮮総連「共同声明」を検討  
(読売、6月14日、38面)

前日の全面礼賛から見ると、若干の留保が見られる。金総書記は〈演出〉を行ったとされるし、また市場の反応として株価の下落にも触れられている。だが他面前日の「歴史的」という形容は〈この日を待っていた〉〈雪解け〉（朝日）と更に誇張されている。読売においても、前日はまだ〈歴史的〉であって歴史そのものとは断言していなかったが、14日には、「歴史の瞬間」がテレビで報道されたことになっている。前日の新聞で韓国大統領は会うだけでも成功だと言っていたのだが、14日の読売では「国内でも」南北融合の兆しがあったとされ、すなわち、すでに半島の南北で融合の兆しがあったとされてしっている。

首脳の発言そのものが見出しとして利用される傾向は続く。中にはすぐには引用と分からないものもある。たとえば朝日の見出しにある「世界が注目」は会談における「今、世界が注目しています」という金総書記の言葉（読売、6月14日、3面）を経ていると推察され、結局新聞は金正日の言葉で、しかもその出典を不明確にしたまま報道している。

ここでは次のような観察ができる。

1 歴史的と歌われたことはまもなく歴史とされ、初会談は融合の兆しとされる。しかもその表現が時には首脳の発言の引用などと織りまぜてあるので、読者はどこまでが事実で、どこからが操作なのかを気づきにくい。新聞はサラミを薄く切り取るよう気付かれにくい手法で、根拠のない誇張表現を拡大し、昨日の根拠のない断定が今日の断定の根拠となる。



2 韓国が発表した 27 分的首脳会談内容にあるのは、殆どすべて、無害な社交辞礼である。無害な話題について意見交換することが、いかなる意味で関係前進を示唆するのかが不明である。

3 14 日の情報で朝日は初めて、情報統制の存在を伝える。つまり今回の訪問について外国のプレスは取材制限を受けており、外国のメディアは、「韓国メディアが代表取材してソウルに送稿してくる原稿や韓国政府のソウルでの会見などをもとに取材、執筆している」（朝日、6 月 14 日、3 面）という点である。本来なら遅くとも前日の新聞紙面で、日本の新聞が得ている情報は独自の取材によるものではなく、ソウルにおける諸発表に基づくものであるという状況説明が行われるべきであっただろう。また日本のマスコミはこの点について状況を改善しようと努力をしたか、韓国の民主主義との関係、朝鮮問題の国際性の点からこの制限をどう考えるか、というコメントがあってもおかしくはない。

6 月 14 日、両首脳は 5 項目からなる南北共同宣言を発表した。

6 月 15 日朝刊

「統一目指す」南北合意 両首脳、共同宣言に署名  
金総書記は訪韓へ  
進路示す平和宣言  
誠意ある実践、課題  
饒舌な素顔、歴史を演出、 歯車回した笑顔の対話  
相互の主張盛る 新たな枠組み産声  
隠れた生活から解放、生気よみがえった握手  
分断の苦悩、いま光、統一取り組み、南北合意  
「驚きと感動です」体中に鳥肌立った  
半世紀の夢、いま正夢

（朝日 6 月 15 日、38-39 面）

金総書記 訪韓を受諾 南北首脳が共同宣言

「統一目指して努力」離散家族訪問団 8 月 15 日交換

(読売 6 月 15 日, 朝刊 1 面)

ベール脱いだ金正日氏, 首脳会談「成功」うたう

話題豊富, 自信満々, イメージ覆す

6 月は希望の月

日米韓連携どうなる

(読売 6 月 15 日, 朝刊 2-3 面)

「融和」に沸く在日同胞, ほの見えた“再会の時”

拉致疑惑解明も期待

南も北も愛する兄弟

(読売 6 月 16 日, 朝刊 1 面)

次のような観察ができる。

1 ここでも今まで通り, 首脳の言葉がそのままヘッドラインとなる。金正日が隠遁生活から解放されたという箇所がその典型である。相手がグラスの酒を一気に飲み干すだけでその背後にある飢餓者の存在を忘れ, 相手に対して親近感を持ち始める人々が少なからずおり, マスコミもこの種の奇妙な友愛の兆しに大きく貢献している。

2 見出しには歴史, 演出, 笑顔など, すでに使われたキーワードが反復して使われている。

3 金正日の訪韓について, 共同宣言では「適切な時期に」という条件がつけられ, それは他の統一を「自主的に」解決するという条件ともかかわり合う。だからこの訪韓は, 在韓米軍, 日米安保のある現在の東アジア情勢において, ほぼ無期限に延長されうる内容であり, それについて「訪韓へ」とつけた朝日の見出しは誇張である。

4 南北が和解に向けて進んだという印象を与え, 南北の今回の合意が

両国の懸案事項のごく一部についてのものであるという点を避けて通り、そのうえであたかもその和解に基づいて他の問題についても進展が期待できそうな印象を与えている。特に日朝間の「拉致疑惑」説明も期待という読売の見出しは、娘が拉致されたと推測される親が、今回の合意についてこれを機会に拉致問題についても進展があればいいと記者からの質問に対して応答したということであって、南北会談でこの問題についての合意も、また話し合われた形跡すらない。だが一般の読者がヘッドラインだけを追うなら、あたかもそう期待できるかのように誤解するだろう。

5 朝日、読売ともに、今回の会談を高く評価する社説を16日に発表している。その前提となるのは、いかなる合意であれ、その合意の存在するのはない場合よりも良いという考え方である。だが何かについて合意するとは、他の何かについて優先度を下げるということに他ならない。今回南北が提示した南北関係のアジェンダが、この合意がない場合と比べて良いものかどうか、は議論の余地がある。それはたとえば、〈統一〉に向かうという前提ものにと、決して末端まで届かない援助物資の流通ルートや、北朝鮮の離散家族の個々の戦後の運命について、調査を請求することが韓国その他の外国から許されるかどうか、という問題である。

6 南北が統一の方向に同意したということは、常識的に考えられる半島がひとつの権力に統合されるという統一とは別の形の統一が当面は模索され、真の統一はいつ実現されるか知らない究極の目標でしかないという点である。だが新聞は、北朝鮮と韓国が「統一」について合意したというとき、そのときの統一という意味と、通常使われる意味での統一という言葉とのあいだの隔たりについて十分に説明していない。

真の統一は朝鮮民族の悲願である。だがもし統一が実際に今回合意された程度の、一国二制度の意味でしかないとき、統一はなおも最優先事項であろうか？ 北の貧困、身分制度、著しい人権の欠如、特権階級が存在等は、統一しても当面は改善されないという結果になることを、今回の会談は確認したようなものであるが、その点について新聞は読者に対して念を押す必要

はないのだろうか？

7 蝶が空間をひらひらと動くさまを、進歩とか退歩とか呼ぶことは誤りである。それは進歩でも退歩でもなく、移動である。だがマスコミは多くの移動としか呼べない外交的変化について、それを二次元の世界から、進歩か後退かを評価したがる。そして特に日本では戦争からの危険から遠ざかることを最大の価値と考えるから、〈和解〉の前にはその他の価値が沈黙する。今回のように和解という文字が外交宣伝において散見する場合には、それを肯定的に評価して怪しまない。

8 読者、識者参加型の報道がある。今回の会談について、あなたはどうかと思うか、またはどう感ずるかを記事にするものである。これには、いくつもの問題がある。第一に、聞く相手をどのように新聞が選択するかについての判断基準は伏せられる場合が殆どである。第二に、かりに意見を求められた者が誤解に基づいて、会談の内容から帰結できない期待を述べても、新聞はそれをそのまま記事として伝えるのみで、それを訂正はしない。その結果、一般の読者はあたかもそれが正当な期待、解釈であるかのように思う。第三に、この種類の手法に感情論が忍びいる可能性が高い。ある者は足が震えたと答え、ある者は無き肉親にこの南北合意のニュースを伝えたかったと述べる。これらはいずれも、その答える者の個人的資質や条件に関わることであって、状況とは無関係である。だが、新聞はこのような感情論に特に反発しない読者の優しさを利用しながら、世論に根拠のないイメージを植え付ける。

この読者、識者参加型の報道では、マスコミはある種の世論調査をしているつもりかもしれない。だが実際に行われているのは、マスコミの導きたい方向に適合する人物を、利用したい時と場合に応じて紙面に出没させているということであろう。毎日新聞は南北国境を越えた韓国女学生林秀卿に意見を聞き、林はこれによって金正日への誤ったイメージが変わるだろうと述べた。だが林ならば、この会談が行われなくとも、同趣旨の発言をしたことであろう。

9 金書記の肉声が聞けたことを彼が有能でユーモアのある指導者との認識へつなげてしまった。彼についてストックとして存在する情報はどうなってしまったのか？ 冗談を言ったとか、機転を聞かせたとか、些末な点が強調された。

10 今回の会談報道が教えてくれる最も重要な教訓は、民族的希望のためには民族的恥部への批判を緩めようとする、韓国市民社会とマスコミの倫理的脆弱である。産経新聞によると、韓国政府は、首脳会談成功のためを理由に、北朝鮮を刺激するような報道を控えるように要請している。その結果、数日間に、金正日礼賛論を含む北朝鮮に対する大きなイメージの変化が韓国マスコミでは起こった。（産経新聞 6月15日、黒田勝弘）

韓国からの情報に日本も依存したことを考え合わせると、情報をスクリーンされる危険を、日本のマスコミは全て認識していたはずであるが、朝日、読売の報道からはそれを知ることは難しい。韓国政府がマスコミを規制するのは政府の利益にかなうことではあるが、それに従って抗議しない、たとえば紙面を白紙にして報道統制に対して抗議しない韓国のマスコミはどの程度信頼できるのだろうか？ その情報をもとに、朝鮮の両国民がこの会談を礼賛し、記念すべき歴史が作られたと、金大中のシナリオに従ってみせた朝日、読売は、ジャーナリストの初歩的な猜疑心を欠いているのではないだろうか？ 中でも批判されるべきは、記事を編集する過程で、必ずしも記者が意図していない内容のヘッドラインをつける編集者たちである。最も単純な読者は、これらヘッドラインを記憶に残し、あたかも全ての朝鮮半島問題を解決する基礎づくりが始まったかのような錯覚を描くであろう。